Stanford 大学から見えた自分

大阪大学医学部附属病院　神谷貴史

・本研修に期待したこととその成果

今回の研修での目的は日本でようやく薬事承認された PET/MR についての知識を得ること，英語でコミュニケーションできようになるための第一歩とすることの2点であった．前者について PET/MR の講義を拝聴することができ，知識の整理をすることができた．また，Stanford 大学では今年の秋ごろから PET/MR のプロトタイプが動き出すとのことで今後さらに注目したいと思う．後者について初日の月曜日や火曜日の講義では内容を理解しようとすることに精一杯で質問を英語でする余裕がなかった．しかし，木曜日のイブニングセミナーでの日米の診療放射線技師の違いに関する Paul 先生の講演は他の演者に比べて早口な英語ながら興味深く拝聴することができ，金曜日に観戦する大リーグのことなどをセミナーが終わった後に会話できたのは英語に頭が慣れてきた証拠かと感じることができた．

・日米の診療放射線技師の違い

米国の診療放射線技師の最初のライセンスでは一般撮影しかできない．CT や MR などの個別の教育を受けた後，試験を合格した技師にそれぞれのライセンスが与えられる．日本の免許の方が幅広く臨床を知ることができると思うが，就職直後から長年にわたり同じモダリティで仕事をする施設が日本でもあることや施設の諸事情などで個人の希望とは異なる部署で働かざるを得ない技師もいることを考えると，個性を表現するために試験をしてから専門のライセンスをあたえるという米国のシステムも悪くないと思った．

・診療放射線技師の国際化

診療放射線技師は医療機関において放射線を用いた検査・治療を業務とする（ウィキペディアより引用）．病院で診療をしていて日本語を話すことができない患者が徐々に増えてきていると感じることもあるが，大半の患者が日本人であることから全ての診療放射線技師が国際化をする必要はないと筆者は考える．しかし，装置の海外メーカーのシェアが大きくなってきている（と筆者は考えている）現状をふまえると，こちらの要望を装置に反映してもらうためには自分の言葉で海外メーカーの技術者に対して直接コミュニケーションをする必要があり，発言力をつけていくためにも日本の優れた研究を海外で報告していく必要があると考える．

・本研修での経験を今後の活動にどう生かすか

本研修では Stanford 大学の研究に対する情熱や充実した施設環境の一部を自分の目で見ることができた．その一方で，日本の研究や知識，放射線診療のレベルも引けをとっていないことも理解できた．また，研修に一緒に参加した同期から大きな刺激を受けることができ，今後もこの同期から脱落しないように自分の課題，研究に対して真摯に向き合っていきたいと思う．

最後になりましたが，この研修に対して多大な尽力をいただいた Stanford 大学関係者，日本放射線技術学会関係者，GEHC-J の皆様，いろいろ事件があった男性 20 人を引率していただいた北里大学の佐藤先生，そして研修参加の許可をしていただいた土’井技師長をはじめとする大阪大学医学部附属病院医療技術部の皆様に心より感謝いたします．

当院から Stanford 大学に留学中であった梁川先生（左）と筆者（右）